

鮑照詩文用韻考

向 嶋 成 美

I 序

漢魏晉南北朝期の詩人の用韻については、中国音韻学の学者たちによってこれまでいくつもの研究が積み重ねられてきた。この時期の詩人の用韻が音韻研究の学者たちに注目されるのは、先秦期の上古音から隋唐期の中古音への音韻の推移を究明するのにそれが貴重な資料となるからに他ならない。実際、詩人の用韻の検討を通して得られているこれまでの研究の成果は、中国音韻史上の価値ある事実を多く提供してきたと言える。

そこで、漢魏晉南北朝期の詩人の用韻を対象とするこれまでの研究の中、主要なものをいくつか挙げるならば、やや古いところでは于海晏（字は安瀾）氏の『漢魏六朝韻譜』がある^{注1}。この書は、『切韻』（『広韻』）の韻部に準拠しつつ、この時期の韻部の変遷を(1)漢、(2)魏晉宋、(3)齊梁陳の3期に大別して整理したものであるが、当時の押韻資料をほぼ漏れなく収録しているところが貴重である。

次いで注目すべきは、王力氏の「南北朝詩人用韻考」である^{注2}。この論文は、題名が示すごとくに対象とするところは南北朝期の詩人に限られているが、この時期の詩人の用韻の変遷をほぼ(1)宋、(2)齊梁、(3)陳ならびに北朝の3期に分かれ、詩人個人を単位とした記述がなされており、また各詩人の籍貫をも考慮に入れて検討を行うという周到さを持っていて、教示を受けることが多い。

さらに羅常培、周祖謨両氏による『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一冊があり、またこれを継承する周祖謨氏の『魏晉南北朝韻部之演變』という大著も近頃出版された^{注3}。これら二冊を通じて検討されている韻部変遷の大きな枠組としては、于海晏氏の分期がそのまま踏襲されているが、各時代ごとの韻部の分合状況の沿革については、詳細をきわめた追求がなされている。周氏の研究もこの時期の詩人の用韻を対象とする研究の中できわめて重要な位置を占めることに間違いはない。

さて本稿は、如上の研究成果を踏まえつつ、南朝宋の詩人、鮑照(416~466)の用韻についてさらなる検討を加えようとするものである。于氏以下の研究には、当然のことながら鮑照の用韻も十分に視野に収められており、さほど大きな変更を迫るような余地が残されているわけではない。しかし、鮑照はこの時代の詩人の中にあつては珍らしく大量の詩文が今日に伝えられている作家であるから、単独の作家の用韻の状況にある程度の材料に基いて記述するのは一定の意味あることと思われる。またそのことを通じて韻部分合状況の微妙な点において、これまでの研究に付け加えることのできるところもいくつかはある。さらに于氏以下のこれまでの研究は、詩作品のテキストとしての明の張溥の『漢魏六朝百三名家集』や民国時代の丁福保の『全漢三国晋南北朝詩』を採用しており、これらのテキストの持つ不備をそのまま受け入れている欠点も若干目に付く。

そこで本稿は、鮑照の集の中では比較的古い形を伝えている、四部叢刊所収の明の毛斧季校宋本『鮑氏集』十巻を用いて、いま一度鮑照詩文の用韻を整理し、韻部分合の状況の確認を行う。なおその際、韻の分類、配列については、原則として『広韻』に拠ることとする。また相配の関係にある上声、去声の韻については、平声の韻の項で一括して取り扱い、入声の韻だけは別に項を設けて検討することにする。

II 鮑照詩文の用韻

1 唐冬鍾江

唐冬鍾江の4韻が陽声韻のng韻尾を持つものの中でまとまった1類をなすことは、王力、周祖謨の両氏がそれぞれ前掲研究において、南朝宋代用韻の特色の一つとして指摘するところであるが、鮑照詩文のすべての使用例もこれに外れることはない。

(1) 東独用(4例)^{注4}

中豊風窮^{注5}〈松柏篇〉

(2) 東鍾同用(3例)

窮終通容重權從風躬〈傷逝賦〉

(3) 東江同用(1例)

權窓同中風〈翫月城西門廨中詩〉

(4) 東冬鍾同用(1例)

弓風中冬縫封松墉戎功鍾雄〈代陳思王白馬篇〉

(5) 東鍾江同用 (7 例)

重_●龍_△風_△容_△中_△鴻_△蓬_△空_△縫_△濃_△從_△〈代陳思王京洛篇〉、東_△宮_△邦_△鴻_△豐_△風_△鍾_●重_●容_●通_●
 〈數詩〉、終_△松_△重_△通_△峯_△窮_△中_△邦_△〈從倭陵登京岨詩〉

(6) 東冬鍾江同用 (1例)

宮通風冬空容江邦逢功〈還都口號詩〉

また東鍾韻と相配の関係にある上声董腫韻の用例もある。

(7) 董腫同用 (1 例)

動隴 〈園葵賦〉

これらを総合的に見ると、東韻の独用例は4例あるものの、前掲の例以外では、「風終」〈幽蘭詩其五〉、「中風」〈中興歌其四〉、「宮中」〈擬行路難其十五〉のごとくにわずか2字ばかりがたまたま独用されているに過ぎず、他の冬鍾江韻の独用例、また冬鍾江韻のみの同用例も全くない。東韻と他の冬鍾江韻との分離は、王、周両氏の指摘する通り斉梁期以降に現われるものであって、鮑照の用韻においてはまだ見受けられない。

2 支佳

支韻の使用例は11例が見られるが、微韻の字と混用される特殊な2例をしばらく措くならば、他の9例はすべて独用である。

(1) 支独用 (9例)

馳儀離枝知〈代別鶴操〉、規垂池移〈學劉公幹體詩其四〉、崖池垂窺移知〈詠雙鸛詩其一〉、枝崖離斯移〈贈故人馬子喬詩其三〉、馳枝涯疲吹〈發長松遇雪詩〉

このうち後の3例に見える「崖、涯」は、『広韻』では支韻に収められると同時に佳韻にも収められる。このことは両韻の韻値の近似を窺わせるものであるのだが、この平声の支佳韻と相配の関係にある上声の紙蟹韻には確かに同用の例がある。

(2) 紙蟹同用 (1 例)

委洒靡解 〈園葵賦〉

このうち「**酒**」もまた『**広韻**』では紙韻と同時に蟹韻にも収められる字であって、平声の「**崖**、**涯**」の場合と事情は同様である。南朝宋代の用韻において支佳の両韻を一類とするのは、やはり王、周両氏のすでに認めるところであるが、**鮑照**の用韻についても原則として支佳同用と見て差し支えない。

ただ鮑照の用韻には、例外とすべきものがいくつか散見する。その一つは支微同用の例である。

(3) 支微同用 (2例)

飛[●]歸[●]達[●]微[●]祈[●]虧[●] <代邾街行>、奇[●]疵[●]卑[●]非[●] <瓜步山楬文>

またもう一つは、上声紙韻の使用例に見える、平声之韻に相配する上声止韻との通押の例である。

(4) 紙止 (志) 同用 (1例)

邇[△]咫[△]倚[△]迤[△]思[△]紙[△]子 <春羈詩>

特に「思」の字については、『広韻』では平声之韻と相配の去声志韻に属するものであって、上声には収められない。〈春羈詩〉は欠字を含む不完全な作品であって、あるいは誤字の可能性もなくはない。ここでは平声支微同用の例も含め、特殊例として挙げるにとどめたい。

3 脂微

鮑照の用韻における脂微両韻の使用例は、同用を原則としながらも、それぞれの分化の傾向も見えていて、事情はやや複雑である。

(1) 脂独用 (3例)

私帷葵遺 <學劉公幹體詩其一>、帷遺悲 <擬行路難其十二>

(2) 微独用 (3例)

威歸圻唏圍暉衣飛排機微希 <代苦熱行>、飛畿暉衣歸 <紹古辭詩其四>

(3) 脂微同用 (10例)

墟衰威飛依 <蕪城賦>、歸飛暉微衰達 <觀漏賦>、衰達暉非歸 <傷逝賦>、歸悲衰追 <代北風涼行>、帛飛衣衰威機 <詠雙鸞詩其二>、輝依歸達暉衣追飛韋 <吳興黃浦亭庾中郎別詩>、達畿歸機闌輝蕤微達飛巍衰誰 <夢歸鄉詩>、衰悲暉歸 <松柏篇>、機暉稀霏微達帷 <秋夕詩>、微微帛推輝機衣 <河清頌>

脂微同用の10例について見ると、微韻の字を主としながら、若干の脂韻の字が混在する形を採るのであるが、その脂韻の字を取り出すと、「墟、衰、悲、追、達、蕤、誰、帷、推」の諸字であり、それらはいずれも脂韻の中でも合口呼であるという共通性を持つ。そして王力氏の「南北朝詩人用韻考」によれば、脂韻合口呼の中でも舌齒音に属する「衰、推、追、誰」などは、南北朝期にあつては微韻の一部に位置づけられていたとされる^{注6}。これらの諸字を微韻に属させることになると、鮑照の用韻では脂微韻それぞれの独立性がかなり高くなってくる。

また鮑照の用韻では脂韻独用の例は必ずしも多くはなかったが、相配の上声旨韻、去声至韻にもそれぞれ独用の例を見ることができる。

(4) 旨独用 (1例)

揆軌 <贈顧墨曹詩⁷>

(5) 至独用 (3例)

利棄 <代淮南王其二>、利位次嚮至地媚棄 <詠史詩>、驚利備覬嚮器 <河清頌>

脂微兩韻の字については、晋代以前にあっては通押されていて、やがて齊梁期以降に明瞭に分化して行くことがすでに知られている。そうした中において、鮑照の用韻の状況を見ると、周祖謨氏の『魏晉南北朝韻部之演變』にすでに指摘されるところではあるが⁸、兩韻分化の傾向が窺われ、齊梁期の用韻に接近していると言ってよい。なお、微韻が脂韻以外の他の韻と混用されるもの、さらには去声至韻が平声之韻と相配の去声志韻と混用されるものを特殊な例として次に掲げておく。

(6) 微灰同用 (2例)

徊摧飛依歸 <舞鶴賦>、禕衣晞飛回歸暉 <代白紵舞歌詞其一>

(7) 微皆灰咍同用 (1例)

排⁹懷開來揆歸才猜萊臺迴 <代放歌行>

(8) 至志同用 (1例)

次地異棄利媚稚至 <冬日詩>

4 之

鮑照の用韻では、之韻はごく特殊な場合を除くと、すべて独用である。このことは相配の関係にある上声止韻、去声志韻の場合でも変りはない。

(1) 之独用 (12例)

時茲疑基絲辭期 <傷逝賦>、絲治淄旗欺 <紹古辭詩其二>、詞思疑之基持期詩茲絲時嗤 <答客詩>、疑¹⁰時怡旗思滋辭持期 <送從弟道秀別詩>、時期治醫辭 <松柏篇>

(2) 止独用 (4例)

士里理喜已止始起耳李 <代門有車馬客行>、士趾里汜耳祀裏起似子市 <登廬山詩其二>

(3) 志独用 (1例)

治值意置異思 <擬行路難其九>

特殊な例は、次の場合である。

(4) 之灰咍同用 (1例)

頽埃摧基 <蕪城賦>

之韻の字は、齊梁期以降からは脂韻の字との通押が目立ってくるのであるが、鮑照の用韻にあつてはまだその傾向は窺えない。

5 魚虞模

魚虞模の3韻は、鮑照の用韻では区別なく通押されている。

(1) 虞独用 (1例)

拘虞濡娛 <松柏篇>

(2) 魚虞同用 (1例)

居疏渠舒筭除須 <代白紵舞歌詞其二>

(3) 虞模同用 (3例)

途颺狐趨鵠膺 <蕪城賦>、塗虞珠 <河清頌>

(4) 魚虞模同用 (5例)

都儒書壺隅廬初疎 <擬古詩其五>、塗榆圖湖初衢漁茶腴居敷渝徒芻 <從過舊宮詩>、隅區除塗吳居扶 <凌煙樓銘>

このことは平声の魚虞模韻に相配の上声の語變姥韻、去声の御遇暮韻の場合も同様である。

(5) 語独用 (1例)

處旅 <酒後詩>

(6) 語變同用 (1例)

舉女紵舞 <代白紵曲其一>

(7) 語姥同用 (1例)

所滸楚渚舉紵 <代權歌行>

(8) 御独用 (1例)

筓慮 <園葵賦>

(9) 遇独用 (1例)

霧住 <代別鶴操>

(10) 暮独用 (3例)

近步蠹路 <尺蠖賦>、暮怖忤 <擬行路難其十一>

(11) 遇暮同用 (3例)

懼路霧趣顧素樹遇 <還都道中詩其三>、素顧路慕懼誤免 <擬古詩其一>

この魚虞模の3韻についても、王力、周祖謨の両氏によれば、齊梁期以降、魚韻と虞模韻との分化が進むとされる。鮑照の用韻の場合には、全体としてまだその分化はないと見るのが妥当であるが、去声の韻に関してだけはややその傾向が現われ始めていると言えそうである。

6 齊皆灰哈

この齊皆灰哈の4韻については、王力氏の「南北朝詩人用韻考」では、鮑照が同用しているとする^{註11}。ところが鮑照の用韻の具体例を仔細に検討してみると、必ずしもそうは言えないところがある。

(1) 齊独用 (1例)

堤齊〈採菱歌其六〉

(2) 哈独用 (1例)

臺萊〈擬行路難其十五〉

(3) 齊皆同用 (1例)

閨懷〈代淮南王其二〉

(4) 皆哈同用 (1例)

埋懷開哀臺〈松柏篇〉

(5) 灰哈同用 (1例)

臺栽來災苔梅灰哉〈代挽歌〉

(6) 皆灰哈同用 (2例)

排哀臺摧隈乖懷〈野鵝賦〉、懷臺開苔栽梅盃摧〈三日詩〉

鮑照の齊皆灰哈韻の使用例は、以上に前掲3—(6)、(7)、4—(4)を加えたものがすべてである。また相配の韻についても、灰韻に相配の去声隊韻、哈韻に相配の去声代韻に次の例が見えるのみである。

(7) 代独用 (1例)

代載〈蕪城賦〉

(8) 隊代同用 (1例)

佩愛〈代淮南王其二〉

これを見ると、齊韻が他の3韻と混用されるのは、(3)の「閨、懷」の1例のみである。しかもこの「閨」については、この詩を採録する『玉台新詠』では「開」に作っており、もし「開」であれば、これは哈韻に属することになる。してみると、鮑照の用韻にあつては、齊皆灰哈韻同用の根拠はかなり不確かというべきであり、これらの韻の使用例が少ない中での判断は相当に困難ではあるけれども、齊韻と他の3韻との間には区別があつたと見るのも不可能ではない。そして齊梁期以降には実際に齊韻が他の3韻から分化して行くのであつて、周祖謨氏は前掲書において、鮑照の用韻が齊梁期以後の形を導く先声になるとの見方を示している^{註12}。傾聴すべき見解と考えられる。

7 真諄

真諄韻はn韻尾を持つ陽声韻である。鮑照の用韻で、この両韻は一類をなし、中では通押されるが、同じn韻尾を持つ文欣韻とはごく稀な例を除いて混用されることはない。

(1) 真独用 (4例)

神珍仁辛身〈野鵝賦〉、因神辰塵伸〈懷遠人詩〉

(2) 真諄同用 (10例)

申晨親巾陳淪人塵〈代蒿里行〉、晨鄰塵人新因春〈代少年時至衰老行〉、巾親人身神脣珍塵申晨陳春〈學古詩〉、晨聞津塵人親身春淪辛〈行樂至城東橋詩〉

真諄韻と文欣韻との混用は、次の1例のみである。

(3) 諄文欣同用 (1例)

殷鵠文雲羣〈野鵝賦〉

また一般には真諄韻と同用とされる臻韻については、鮑照の用韻では真諄韻との同用の例はなく、かえって山先仙韻と混用されるものがある。

(4) 臻山先仙同用 (1例)

溱川年山涓淵鮮〈河清頌〉

これは他に殆んど例を見ないものであることから、偶然の通押と考えるほかない。

8 文欣

鮑照の用韻で、文欣韻は上述のごとくに真諄韻との同用例は7一(3)の1例のみであり、他にも元魂韻との同用例が2例見られるものの、原則としては両韻間のみの通押と見て差し支えない。

(1) 文独用 (4例)

雲分聞羣文〈自礪山東望震澤詩〉、雲群漬聞君〈紹古辭詩其五〉

(2) 文欣同用 (2例)

殷勤墳雲文君分〈蕪城賦〉、勤分漬羣紆聞〈還都道中詩其一〉
元魂韻との同用例は、次のごとくである。

(3) 文元同用 (1例)

聞軒〈河清頌〉

(4) 文元魂同用 (1例)

分聞溫轅門村論〈見賣玉器者詩〉

9 元魂痕

陽声韻のうち、n韻尾では元魂痕寒桓刪山先仙の9韻が大きな1群をなす。

鞍竿〈在荊州與張史君李居士連句〉

(2) 刪独用 (1例)

顏還〈幽蘭詩其一〉

(3) 寒桓同用 (4例)

難丸^{注14} 瀾觀歎〈歡漏賦〉、單殘寒酸闌歡彈〈園中秋散詩〉

(4) 寒刪同用 (2例)

丹難顏還蘭〈贈故人馬子喬詩其五〉、還關寒顏難歎〈擬行路難其十四〉

(5) 寒桓刪同用 (2例)

酸寒顏端〈代東門行〉、寒還彈酸單殘難紉餐〈和王護軍秋夕詩〉

寒桓刪3韻を越える同用の例は、先に挙げた元韻との同用例9の(4)、また元先韻との同用例9の(6)の他、刪韻と先韻との次のような同用例もある。

(6) 刪先韻 (1例)

年顏攀關還〈詠蕭史詩〉

また相配の上声韻には用例がなく、相配の去声韻には寒韻相配の翰韻、桓韻相配の換韻、刪韻相配の諫韻にまたいくつかの用例がある。

(7) 換独用 (1例)

館玩〈蕪城賦〉

(8) 翰換同用 (2例)

旦漢亂散〈代鳴鴈行〉

(9) 翰換諫同用 (2例)

難換鴈岸晏散彈〈冬至詩〉、灌亂旦晏岸館漫彈〈苦雨詩〉

以上をまとめるならば、鮑照用韻における寒桓刪韻は、他の韻との同用の例を若干含みながらも、3韻のまとまりがかなり強く、1類をなすと見て差し支えない。

11 山先仙

山先仙の3韻は、鮑照の用韻ではまとめて1類をなすものであるが、先の元魂痕韻や寒桓刪韻に比べると、はるかに使用例が多く、かつ他の韻と混用されることの少ない類である。

(1) 山独用 (1例)

間山〈採菱歌其四〉

(2) 山先同用 (3例)

肩天山妍〈蕪城賦〉、間懸山烟〈代別鶴操〉

(3) 先仙同用 (10例)

煙絃天泉旋年 <傷逝賦>、傳前妍偏然遷^{注15} <紹古辭詩其一>、妍圖鮮年堅
 <詠白雪詩>、然泉年錢天 <擬行路難其五>

(4) 山先仙同用 (7 例)

山前妍絃先篇宣間 <代朗月行>、泉堅年山川煙填賢 <擬古詩其四>、泉煙年
 絃川山蓮前賢 <擬青陵上栢詩>、天仙淵山煙泉間絃傳旋 <白雲詩>、年綿
 賢山煙牽傳間 <和王丞詩>

山先仙の 3 韻の枠を越える他の韻との同用例は、前掲の 7-(4)、9-(5)、10-(6)のわずか 4 例にしか過ぎず、それらは偶然と言ってよいほどの特殊な例である。

また先韻相配の去声霰韻、仙韻相配の去声線韻にも、次のような用例がある。

(5) 霰独用 (1 例)

電見讌 <擬行路難其十一>

(6) 線独用 (1 例)

面倦變膳 <河清頌>

(7) 霰線同用 (3 例)

變見戰賤箭 <尺蠖賦>、縣殿宴變甸遍 <侍宴覆舟山詩其一>

相配の去声韻をも含めて、山先仙の 3 韻はきわめてまとまりの強い 1 類と言える。

12 蕭宵肴豪

陰声韻の蕭宵肴豪の 4 韻が 1 類をなすことは、于氏の『漢魏六朝韻譜』以来、一般に認識されているところである。一方、周祖謨氏は前掲書において、齊梁期以後、蕭宵韻が肴豪韻と分かれて、独立した 1 部をなすようになる先駆けが晋宋期の詩人に見られるとし、鮑照をその中の一人に挙げている^{注16}。ところが鮑照詩文の用韻にはこの 4 韻の使用例がきわめて少なく、わずか次の 2 例しかない。

(1) 宵独用 (1 例)

僑霄 <擬行路難其十三>

(2) 宵侯同用 (1 例)

朝銷頭 <擬行路難其十>

この中、(2)の侯韻との同用例については、王力氏の「南北朝詩人用韻考」において特に例外の扱いがなされるものである^{注17}。

そして相配の韻については、宵韻相配の上声小韻、豪韻相配の上声皓韻に次

のような例がある。

(3) 皓独用 (4例)

草[●]早[●]道[●]老[●] <贈故人馬子喬詩其一>、抱[●]腦[●]保[●]好[●]道[●]草[●]老[●] <在江陵歎年傷老詩>

(4) 小皓同用 (1例)

天[●]少[●]抱[●]保[●]草[●]藻[●]老[●]討[●]道[●] <傷逝賦>

上述のごとくに周氏が判断されたについては、恐らくは平声宵韻の独用例、あるいは上声皓韻の独用例が根拠になっているのであろうが、いかんせんこれらのわずかな例からそのことを導き出すのは困難であって、ここは蕭宵肴豪の4韻を1類とするのがより妥当な見方であると思われる。

13 歌戈麻

陰声韻の歌戈麻3韻については、この3韻のみが1類をなしていて、他の韻との混用は全く例がない。

(1) 歌独用 (4例)

何[●]多[●]歌[●] <蕪城賦>、何[●]多[●]羅[●] <擬古詩其七>

(2) 麻独用 (3例)

華[●]麻[●] <採菱歌其三>、斜[●]華[●]花[●]霞[●] <藥奩銘>

(3) 歌戈同用 (5例)

波[●]羅[●]荷[●]波[●]過[●]歌[●]何[●] <芙蓉賦>、阿[●]河[●]羅[●]多[●]禾[●]窠[●]何[●] <代空城雀>、多[●]過[●]羅[●]河[●]波[●] <學陶彭沢體詩>

(4) 歌麻同用 (5例)

多[●]華[●]娉[●]霞[●] <舞鶴賦>、多[●]歌[●]華[●] <夜聽妓詩其二>、多[●]嗟[●]花[●] <梅花落>

(5) 歌戈麻同用 (4例)

歌[●]河[●]何[●]華[●]霞[●]葩[●]梭[●]娥[●]羅[●]和[●]多[●]過[●] <代堂上歌行>、波[●]阿[●]羅[●]河[●]華[●]芽[●]霞[●]家[●]歌[●]多[●]何[●] <還都至三山望石頭城詩>、和[●]波[●]柯[●]羅[●]遐[●]牙[●]家[●] <河清頌>

鮑照の用韻で、歌戈麻の3韻が同用であることに全く問題はない。

14 陽唐

陽声韻ng韻尾の陽唐韻は、鮑照の用韻ではきわめて使用例の多いものであるが、これも2韻で1類をなして、他の韻と混用されることはない。

(1) 陽独用 (4例)

陽[●]方[●]強[●]望[●]梁[●]霜[●]楊[●]張[●]良[●]瘍[●] <代出自薊北門行>、揚[●]法[●]18床[●]嘗[●]良[●] <藥奩銘>

(2) 陽唐同用 (17例)

梁[●]傷[●]昌[●]亡[●]光[●]方[●]芳[●] <觀漏賦>、陽[●]方[●]崗[●]場[●]行[●]楊[●]長[●]忙[●]忘[●]傷[●]漿[●]光[●] <代邊居行>、央[●]裝[●]堂[●]梁[●]行[●]涼[●]張[●]裳[●]光[●]觴[●] <秋夜詩其一>、煌[●]羌[●]箱[●]牆[●]望[●]裝[●]張[●]王[●]梁[●]漿[●]光[●]章[●]狂[●] <建除

詩)、光霜陽箱梁鄉傷〈登翻車峴詩〉、陽光鄉潢莊堂芳箱簾〈喜雨詩〉
 また陽韻相配の上声養韻、唐韻相配の上声蕩韻についても、次の同用例がある。

(3) 養蕩同用 (2例)

杖壤敞掌兩映放¹⁹〈園葵賦〉、長廣上爽賞想莽〈望水詩〉
 陽唐の両韻も鮑照の用韻では確実に同用である。

15 庚耕清青

陽唐韻と同じ陽声韻ng韻尾を持つ庚耕清青の4韻については、これも鮑照の用韻にあつては陽唐韻と並んで使用例の多いものであるが、その押韻状況は次の通りである。

(1) 庚独用 (2例)

明生〈飛鵝賦〉、驚形〈尺蠖賦〉

(2) 庚清同用 (6例)

明城傾榮清〈芙蓉賦〉、平榮鳴情生誠〈擬古詩其八〉、生成嬰情〈松柏篇〉

(3) 庚青同用 (1例)

生經〈代淮南王其一〉

(4) 耕青同用 (1例)

庭莖嬰爭〈擬行路難其十一〉

(5) 庚清青同用 (12例)

榮行城庭局驚寧〈野鵝賦〉、城情平榮生靈經行庭齡聲腥〈代昇天行〉、行冥
 荆旌鳴京情零盈〈從臨海王上荆初新渚詩〉、齡生盈精聲城城征名〈擬行路
 難其十三〉、楹榮名經橫榮清靈情并〈登廬山詩其一〉、零驚鳴征清榮城生
 〈秋日示休上人詩〉

相配の去声韻についても、庚韻相配の映韻、耕韻相配の諍韻、清韻相配の勁韻、青韻相配の徑韻に次のような用例がある。

(6) 映勁同用 (2例)

盛詠慶性映〈河清頌〉

(7) 映勁徑同用 (1例)

聖定淨性盛命映聽詠正〈園葵賦〉

(8) 映諍勁徑同用 (1例)

命迸性逕病定盛敬〈與伍侍郎別詩〉

これらを総合的に見ると、庚耕清青の4韻は、相配の去声韻をも含めて、たがいに通押しており、他の韻と混用されることはないから、原則として一まと

まりの類と見て差し支えない。王力、周祖謨の両氏がすでに指摘するように、
齊梁期には青韻を他の3韻から独立させる詩人が現われている。しかし鮑照の
場合には、まだその傾向は窺えない。

16 蒸登

ng韻尾の陽声韻である蒸登の兩韻については、于氏の『漢魏六朝韻譜』以
来、それぞれが独用とされるものである。そして鮑照の用韻では、蒸韻の用例
が2例見られるだけで、登韻の用例はない。

(1) 蒸独用 (2例)

繩冰仍興勝蠅陵昇稱憑膺〈代白頭吟〉、澄勝凝興〈與謝尚書荅三連句〉
鮑照の場合も、当時の一般的な形から外れることはないと言ってよい。

17 尤侯幽

陰声韻の尤侯幽の3韻は、鮑照の用韻において他の韻の字との混用はなく、
まとまりを持った1類と見なされる。

(1) 尤独用 (5例)

憂流儔愁〈擬阮公夜中不能寐詩〉、兵不由抽〈松柏篇〉

(2) 侯独用 (1例)

樓鈎〈飭月城西門廨中詩〉

(3) 尤侯同用 (10例)

頭鈎_○離遊丘州浮侯_○流求憂_○〈代結客少年場行〉、頭遊_○留州樓_○流收疇柔憂丘_○
〈代陽春登荆山行〉、洲留儔_○適鷗_○流浮秋遊憂_○〈潯陽還都道中詩〉、流羞休遊_○
留洲_○陬浮州柔謳球猷_○〈蒜山被始興王命作詩〉

また尤韻相配の上声有韻、侯韻相配の上声厚韻にも次のような用例がある。

(4) 有独用 (1例)

手酒有_○〈代雉朝飛〉

(5) 有厚同用 (1例)

九偶_○〈字謎其三〉

これらを見ると、相配の上声韻も含めて、尤韻の諸字の中に若干の侯韻の字
が混在するだけで、幽韻の字は見当らない。このことはもともと侯韻、とりわ
け幽韻には所属の字が少ないことに因るのであって、尤侯幽の3韻が魏晉南北
朝を通じて1類をなしていることは、やはり于氏の『漢魏六朝韻譜』以来、一
般に認識されるところであり、鮑照の場合も同様であると考えられる。

18 侵

m韻尾の陽声韻、侵韻は、全くの独用であって、例外はない。

(1) 侵独用 (10例)

深陰林尋音心金沈〈日落望江贈荀丞詩〉、音心林陰深禽沈岑尋〈和傅大農
與僚故別詩〉、陰深淫吟禽心任琴〈山行見狐桐詩〉

相配の上声寝韻にも、次の用例がある。

(2) 寝独用

甚凜〈春詠詩^{注20}〉

侵韻が他の韻と決して通押することのない独用であることに、全く問題はな
い。

19 覃

侵韻と同じm韻尾を持つ覃談鹽添咸銜霰凡の諸韻は、もともと所属の字が少
ないこともあり、鮑照の用韻ではわずか覃独用の次の1例のみである。

(1) 覃独用

潭南〈採菱歌其一〉

ここではこの例を挙げるだけにとどめる。

20 屋沃燭覺

k韻尾の入声韻である屋沃燭覺の4韻は、鮑照の用韻においては原則として
通押の1類をなす。

(1) 屋独用 (4例)

逐服陸宿目覆竹〈擬古詩其三〉、舳目木谷狀陸宿〈還都道中詩其二〉、牧陸
服肉睦築熟宿覆〈觀圃人藝植詩〉、六宿〈字謎詩其三〉

(2) 屋覺同用 (2例)

竹遯[△]〈河清頌〉、陸服木斲谷[△]〈石帆銘〉

(3) 屋沃燭同用 (1例)

木促鵠^{注21}録玉曲^{●●●●}〈紹古辭詩其三〉

(4) 屋燭覺同用 (2例)

渥曲[△]録玉燭木^{●●●●}〈芙蓉賦〉、仆覺促玉屬木哭續^{●●●●}〈觀漏賦〉

(2)、(3)、(4)の諸例を見ると、鮑照の用韻にあつては屋沃燭覺の4韻が通押で
あつたと判断できる。ただ、齊梁期以降には屋韻を独用する詩人が現れるので
あるが、鮑照にも屋韻の独用例が4例見られ、しかもそれらがすべて詩の用韻
であることが注目される。このことは、詩の場合は屋韻のみの厳密な形で、そ
して賦と文の場合は他の韻をも含めたやや緩やかな形でという、用韻上の区別
のあつたことを想像させる。

21 葉鐸

やはりk韻尾の入声韻である葉鐸の両韻は、鮑照の用韻では通押の同用である。

(1) 鐸独用 (2例)

作薄 <尺蠖賦>、樂閣 <中興歌其二>

(2) 葉鐸同用 (11例)

廓落漠灼閣躍 <舞鶴賦>、寔雀樂墜鶴落籜幕酌鐸 <秋夜詩其二>、落作閣籜
幕藥燦藿託諾薄洛涸酌 <詠採桑詩>、薄墜爵藿閣作罅藥洛 <臨川王服竟還
田里詩>、鵲閣寔爵躍落博絡作樂託薄 <蜀四賢詠詩>

葉鐸兩韻の同用は、全く問題がない。

22 陌麦昔錫

k韻尾入声韻の陌麦昔錫の4韻は、次のような通押の状況である。

(1) 陌昔同用 (2例)

隙昔役劇 <松柏篇>

(2) 昔錫同用 (1例)

惕錫壁歷 <石帆銘>

(3) 陌麦昔同用 (2例)

獲²²迫益宅隔 <松柏篇>

(4) 陌昔錫同用 (1例)

寂迹劇溺石覲逆 <仏影頌>

(5) 陌麦昔錫同用 (3例)

役客白石夕陌翮戚 <遊思賦>、策歷迹石滴壁積白客惜 <過銅山掘黃精詩>、
繹宅策迹壁石脈碧客籍魄覲帛 <從登香爐峯詩>

これらを見ると、陌麦昔錫の4韻は、全く区別なく通押されており、同用と判断できる。なお職韻との混用の例があるので、次に掲げておく。

(6) 陌麦昔職同用 (1例)

劇夕白益客惜赤隙獲沍寥 <代貧賤愁苦行>

23 職徳

k韻尾入声韻の職韻と徳韻とは、前掲22-(6)の陌麦昔韻と職韻との混用の例を除くと、それぞれが独用であって、通押されることはない。

(1) 職独用 (7例)

抑蝕逼息織力棘 <遊思賦>、翼力逼直臆色 <代雉朝飛>、灰色翼逼食力息
<行京口至竹里詩>、食息翼息側織直 <擬行路難其六>

(2) 徳独用 (1例)

國北黑契德〈河清頌〉

入声職徳韻は平声の蒸登韻と相配の関係にあるが、この職徳韻がそれぞれ独用であることからしても、蒸登韻それぞれの独用が判断できよう。

24 質術櫛

t韻尾を持つ入声韻の中でも、鮑照の用韻では質術櫛の3韻が1つのまとまりを持つ。

(1) 質独用 (5例)

密質悉〈舞鶴賦〉、室日畢〈松柏篇〉、逸密溢雙^{註23}匹筆〈飛白書勢銘〉

(2) 質術同用 (4例)

恤一秩疾失逸〈觀漏賦〉、室密疾日質溢慄述畢〈從庾中郎遊園山石室詩〉

(3) 質櫛同用 (1例)

疾一瑟日〈登雲陽九里埭詩〉

この3韻は鮑照の用例は少ないけれども、(2)、(3)からしてまとまりを持った1類と見てよい。

25 月沒

このt韻尾の入声韻は、鮑照の用韻では次のような使用例を持つ。

(1) 月沒同用 (3例)

發越月髮沒歇〈芙蓉賦〉、沒月發歇越髮〈岐陽守風詩〉

ただしこの月沒の両韻は、同じt韻尾を持つ物韻や屑薛韻とも広く通押する。

(2) 月沒物同用 (1例)

月越髣歇闕沒〈觀漏賦〉

(3) 月沒屑薛同用 (2例)

闕髮月勃越發歇骨沒晰^{註24}〈代陸平原君子有所思行〉、雪別發樾滅結節絕^{▲▲▲▲▲}〈發後渚詩〉

入声月沒韻は、原則として2韻でまとまった1類をなしながらも、また他の韻との広い通押例も見られるものである。

26 屑薛

t韻尾の入声韻の中でも、屑薛の両韻はまた一まとまりをなす類である。

(1) 薛独用 (1例)

絶滅^{〇〇}〈蕪城賦〉

(2) 屑薛同用 (5例)

絶潔悅埒^{〇〇}〈芙蓉賦〉、轍結悅別列絶^{〇〇〇〇〇}〈代悲哉行〉、滅訣節説^{〇〇}〈松柏篇〉

27 曷末

やはりt韻尾の入声韻である曷末韻には、次のような同用例がある。

(1) 曷末同用 (2例)

闊達^〇 <吳歌其二>、達藹^〇拊^〇闌^〇闊^〇葛^〇 <紹古辭詩其七>

なおt韻尾の入声韻には、他に迄、黠、鎋の諸韻があるが、それらの韻に鮑照の用例はない。

28 緝

p韻尾の入声韻緝韻は、平声侵韻に相配の韻であるが、侵韻がそうであったように、緝韻もまた独用である。

(1) 緝独用 (3例)

濕入急泣戢立集 <代白紵舞歌詞其三>、集急立澁 <學劉公幹體詩其二>

p韻尾の入声韻にも、他に合、盍、葉、帖、洽、狎、業、乏の諸韻があるが、それらいずれにも鮑照の用例はない。

III 結語

于海晏氏の『漢魏六朝韻譜』を初めとして王力氏の「南北朝詩人用韻考」、周祖謨氏の『魏晉南北朝韻舞之演變』もみな、南朝宋と齊との間に韻部の変遷の上で大きな変化があったとすることで意見が一致している。鮑照は宋代に生きた詩人であるのだが、その用韻の状況を見ると、あるものは魏晉期の形をそのまま継承していたり、またあるものは齊以降の変化を先取りしたりしていて、なかなか複雑である。たとえば、脂之の両韻がそれぞれ独立して用いられるのは前者の例であり、齊韻が皆灰咍韻からの分離の兆しを見せているのは後者の例である。

そこで鮑照用韻の韻部の枠組みを『広韻』の韻部によって示すならば、ほぼ次のごとくにまとめることができる。

(1)唐冬鍾江、(2)支佳、(3)脂微、(4)之、(5)魚虞模、(6)齊、(7)皆灰咍、(8)真諄、(9)文欣、(10)元魂痕、(11)寒桓刪、(12)山先仙、(13)蕭宵肴豪、(14)歌戈麻、(15)陽唐、(16)庚耕清青、(17)蒸、(18)尤侯幽、(19)侵、(20)覃、(21)屋沃燭覺、(22)葉鐸、(23)陌麥昔錫、(24)職、(25)德、(26)質術櫛、(27)月沒、(28)屑薛、(29)曷末、(30)緝

なおここに示したのは、飽くまでも鮑照用韻の例があるものに限ってのことであって、当然ながら『広韻』の韻部を網羅していない。たとえば登韻などは、相配の入声韻德韻が職韻と分かれていることからすると、1つの独立した韻と考えられるが、用例がないため省略していることを断っておかねばならない。

そして鮑照の用韻でここに示した枠組みを越えた広い範囲での通押の例を見ると、詩以外の賦や文の用韻例が多いことに気付かされる。たとえば4—(4)の之灰咍同用例の「蕪城賦」、7—(3)の諄文欣同用の「野鵝賦」、7—(4)臻山先仙同用の「河清頌」、9—(6)の元寒刪先同用の「石帆銘」、25—(2)の月沒物同用の「觀瀾賦」といった具合である。また20屋沃燭覺の項に示したように、屋韻の独用例はすべて詩の用韻であり、屋沃燭覺の4韻の通押例はほとんどが賦や文であることも同様のことを窺わせるものと言ってよい。詩の場合は厳密に、それ以外の賦や文の場合はやや緩やかにという用韻上の了解のあったことが想像できるのである。

以上は、鮑照詩文の用韻を調査して得られたことの基礎的な報告である。個々の事象に関わる音韻史上の諸問題、さらには最後に付言した詩と賦、文との用韻の差についても、他の詩人の場合はどうであるかなど、なお検討を加えるべきことが残っている。それらについてはまたあらためて考察したいと思う。

注

注1 中華印書局、1936年。汲古書院影印版、1970年、また暴拯群校改、河南人民出版社、1989年がある。

注2 『清華學報』11-3、1936年。『龍蟲並雕齋文集』第一冊、中華書局、1980年、また『王力文集』第十八卷、山東教育出版社、1991年にも収められる。

注3 『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一冊、科學出版社、1958年。『魏晉南北朝韻部之演變』、東大圖書公司、1996年。

注4 『廣韻』韻部の枠組に準拠して、独用また同用のすべての形を掲げる。具体的な用例については、紙幅の都合上、省略したものがある。

注5 毛校宋本は躬に作るが、張溥本、丁福保本等の通行本に従う。

注6 『王力文集』23頁。

注7 この詩は毛校宋本にはないが、通行本によって補う。

注8 注3前掲書10頁。

注9 『文選』李善注本、鮑照集通行本は、非に作る。ただし、毛校宋本の他、『文選』五臣注本も排に作り、『樂府詩集』の注にも「一に排に作る」とある。

注10 通行本は悲に作るが、悲は脂韻に属し、鮑照の用韻には脂之同用の例は他にない。

注11 前掲書25頁。

注12 前掲書12頁。

注13 通行本は榮に作る。榮は清韻に属し、翻との通押は考えにくい。

- 注14 毛校宋本は九に作るが、通行本に従う。
- 注15 通行本は還に作るが、還は刪韻に属し、鮑照の用韻では刪韻と先仙韻との同用は、10—(6)以外例はない。
- 注16 前掲書20頁。
- 注17 前掲書28頁。
- 注18 毛校宋本は楊に作るが、通行本に従う。
- 注19 毛校宋本は散に作るが、通行本に従う。
- 注20 この詩は毛校宋本にないが、通行本によって補う。
- 注21 毛校宋本は鶴に作るが、通行本に従う。
- 注22 毛校宋本は護に作るが、通行本に従う。
- 注23 毛校宋本のみならず、諸本みな雙に作るが、雙は平声江韻に属する字であって疑問が残る。
- 注24 毛校宋本、さらにはこの詩を収める『文選』も昧に作る。そして于氏『漢魏六朝韻譜』は、これを末韻とする。しかしここでは『樂府詩集』が晰に作るのに従った。
(筑波大学)